

 書評

Toshiya Inada 著

DIEPSS

A second-generation rating scale for antipsychotic-induced extra-pyramidal symptoms

中村 純

晴和病院副院長稲田俊也博士が1994年にハーバード大学留学中に考案した薬原性錐体外路症状の評価尺度(DIEPSS)は、今やわが国だけでなく、韓国、台湾、中国など海外で行われている抗精神病薬の臨床開発試験でも使用されている評価尺度である。稲田先生は1996年に日本語版DIEPSS解説書「薬原性錐体外路症状の評価と診断」(星和書店)を発刊されたが、以来、先生自身が全国各地でDVDを用いた、この評価尺度のトレーニングを行われ、本評価尺度の高い信頼性と妥当性は示されてきた。DIEPSSは、これまでの錐体外路症状の臨床評価尺度の欠点を補って開発されたと考えられ、私も数回、抗精神病薬の開発時に、稲田先生よりDIEPSSのトレーニングを受けたが、臨床に即したわかりやすい解説により評価者間の一致率も高い評価尺度であることを実感した経験を持っている。

抗精神病薬の副作用の評価は、第2世代の抗精神病薬が導入された現在でも、抗精神病薬が抗ドパミン作用を有する薬剤であることに変わりはなく重要である。これまでは、臨床試験で用いられてきた抗精神病薬誘発性の錐体外路症状に対する評価尺度としてはAIMS(abnormal involuntary movement scale)、barnsakathisia scale (BAS)、Simpson-Angus scale (SAS)をセットで使用するのが標準的であったと思われるが、包括的に判断するためには、歩行、動作緩慢、流涎、筋強剛、振戦、アカシジア、ジストニア、ジスキネジア、および概括重

症度の9項目からなるInadaらが開発したDIEPSSがより簡便と考えられる。また、欧米でいまだに用いられているSimpson and Angus評価尺度は、評価項目や検査項目などに課題があることや、評価者間の信頼性が平均0.66と低く、特徴的でないと考えられる眉間叩打のみが信頼性平均0.8を超えていたことが指摘されているにもかかわらず繁用されており、よりDIEPSSを海外の評価にも使用すべきと思われる。

最近ではわが国からも第2世代抗精神病薬が開発されてきたが、これらの薬剤が国際的に用いられるためにもDIEPSSをより国際化させる必要があると考えられ、その意味では、今回のDIEPSS英語版の発刊は時期を得たものであると思われる。本書には、まずDIEPSS開発の経緯が述べられ、その使用法、評価項目の詳細な解説、評価法、日本と韓国での評価者間の妥当性研究、評価者間の信頼性を高めるためのビデオの紹介、これまでのDIEPSSを用いた研究の紹介、文献、さらに日本語版、中国版、台湾版、韓国版、英語版の評価者用マニュアルが付録として付けられており、DIEPSSが国際化するためのすべてが網羅されている。若い研究者には、錐体外路症状に関する英語の教科書にもなると思われ推薦したい。

(産業医科大学精神医学教室)

●B5 80頁 2009 定価3,990円(本体3,800円+税) 星和書店